

# 放送番組センターレポート

## BROADCAST PROGRAMMING CENTER OF JAPAN Report

公益財団法人 放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通 11 横浜情報文化センター  
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110 <https://www.bpcj.or.jp/>

### ■オンラインセミナー 番組アーカイブの意義と未来への活用2021

11月20日、上智大学メディア・ジャーナリズム研究所との共催で、『番組アーカイブの意義と未来への活用2021 ～ポストコロナ時代の番組アーカイブの利活用～』をオンラインで開催した。番組制作者と研究者が、番組アーカイブや映像ライブラリーの利活用事例を発表し、番組アーカイブの将来像についてディスカッションを行った。

らは多くの感想が寄せられ「一つの番組を繰り返して視聴することで、制作者たちがこのシーンを挿入した意図が見えてきた。番組を通して時を超えてその人々と対話しているような気持ちがした」という感想などを紹介した。

#### 【登壇者】

桶田 敦 (大妻女子大学 文学部  
コミュニケーション文化学科 教授)  
小松原 真 (RSK 山陽放送  
岡山映像ライブラリーセンター)  
松原文枝 (テレビ朝日 ビジネスプロデュース局  
イベント戦略担当部長)  
柴野京子 (上智大学 文学部  
新聞学科 准教授)  
【司会】音 好宏 (上智大学 文学部  
新聞学科 教授)

#### ■番組アーカイブ活用事例の報告



柴野氏は、放送ライブラリーで保存している番組を利用した実践型授業「デジタルアーカイブ論」を2017年度から展開している。受講生が未公開番組を様々な資料を参照しながら視聴し、公開に必要なメタデータを作成する授業である。今年度は、当時の風俗が色濃く記録されている、放送番組センターが1970年代に制作したドキュメンタリーを利用した。「これまでは文学紀行のような番組を中心に利用したが、今年はチャレンジングな番組を取り上げた」「18名の学生が手分けして全615カットをデータベース化し、登場する場所や人物、内容などを調べてタグをつけた」と実際の画像とともに具体的な作業を説明した。受講生が



桶田氏は、TBS 報道記者を経て、2011年3月には福島第一原発事故の現地取材対策本部の統括責任者を務めた。その後も取材を続け、本年より福島県東日本大震災・原子力災害伝承館の客員研究員として、メディア資料の収集とアーカイブス化に向けたリサーチに取り組んでいる。「ニュース番組の中で災害がどのように報道されているかという分析をずっと行っている」と、専用機器で24時間365日テレビ番組を録画保存して活用する様子と、その分析結果をグラフを用いて説明した。「今後は、福島県における原子力災害の映像アーカイブスの構築を予定し、新聞、放送各社と話をしているが、なかなかうまくいかない。個別に訪ねて対話を重ね、実現に向けて模索している最中である」と語った。



2017年度より、毎年開催している本セミナーでは、放送ライブラリーの公開番組を授業で利用した大学教員や公共施設の担当者、放送局員が事例報告を行ってきた。本年は、前半では登壇者それぞれの取り組みの報告、後半では番組アーカイブの有り様や、現状の問題点、放送番組センターに期待する役割、今後の利活用の方法を問うパネルディスカッションを行った。



小松原氏は、山陽放送入社後、記者カメラマン歴は延べ33年。現在は自らが立ち上げた岡山映像ライブラリーセンターで、同社創立以来の音声や映像を管理するほか、巷に埋もれている古いフィルムの発掘を続け、それらを一般公開する映像博物館の展開にも携わっている。「ニュース番組を中心とした映像を専門に扱う博物館は、おそらく全国でも他に無いのではないかと話し、施設での展示物、イベント、アーカイブ作業の様子を紹介した。これらの取り組みの中で「映像の著作権をどのようにクリアするか、映像を外へ出す際に無断複製をどのように防ぐか、被写体個人の権利をどう扱うか、埋もれた映像をどこまですくい上げられるか、動態展示として実物に触れられる撮影機器をどう取り扱っていくか等が問題となっている」と、全国の映像ライブラリーに共通する課題を話した。



松原氏は、『ニュースステーション』等の報道番組のディレクター、プロデューサーを務め、2016年『報道ステーション』の「特集 ドイツワイマル憲法の“教訓”」でギャラクシー賞テレビ部門大賞、2019年「テレメンタリー 史実を刻む～語り継ぐ“戦争と性暴力”」でアメリカ国際フィルム・ビデオ祭銀賞を受賞。現在は、歴史やSDGsに関するシンポジウムを手掛けている。「我々テレビ局はアー

カイブ映像を持っているが、それらの映像の当事者から話を聞き、学んでもらう機会を作らなかった」と語り、「広島や長崎、沖縄等の戦争関連のアーカイブ映像を使ってVTRを制作し、映像の当事者である戦争体験者と中高生をオンラインで繋ぎ、直接話をしてもらった」と、『バーチャル修学旅行』と題して実施したイベントについて説明した。「実際に戦争を体験された方、体験を直接聞いた次の世代の人たちの話を聞いてもらうことで、当時の状況を肌で分かってもらった。いかに自分たちの同時代性をもってアーカイブを感じてもらえるか、という試みである」と話した。

### ■パネルディスカッション

後半では前半の報告を踏まえ、具体的な事例を基にしたパネルディスカッションを行った。各登壇者がそれぞれの立場から番組アーカイブの現状や課題、将来像について意見交換した。参加者からも多数の質問が寄せられ、活発な議論が展開された。



松原氏は番組アーカイブをさらに発展させるために「どのような映像がどの放送局にあると把握できることが大事だと思う。放送番組センターはある種のプラットフォームとして、それらの情報共有の枠組みを作れるベースになり得る。法整備などをクリアする議論をして、次のステップに踏み出すものができるよう期待したい」と語った。

小松原氏は放送局員からの視点として「著作権や複製などの問題を考えると、1か所に番組を集めるのは危険だと思う。各放送局では放送した番組を保存しているので、各局がこの情報を開示すれば、日本の放送の全体を知る

ことができるが、放送局は著作物を作る立場にある一方で、利用する立場でもある。同じ局内で相反する考え方を持っている人間もいる。局内でのコンセンサスをどう取りまとめていくか考える必要がある」と語った。



柴野氏は番組アーカイブをさらに活用するための環境整備として「番組アーカイブを使った研究や教育は行われているので、ナレッジデータベースのようなものを作り、具体的な番組の利用事例を次々書き込んでいくなど、一種の運動として盛り上げていくことは実現性が高いと思う」と語った。

桶田氏は番組アーカイブの将来像として「長年携わって災害報道の研究をしているが、地域や地方ごとに特徴がある。まずはそのような範囲の中で局を超えてアーカイブできる、あるいは情報共有できるようになり、それらがどこかのプラットフォームで一つにまとまるのが、理想形になるのではないかと。今後、法整備やアプローチができてくると、よりその地域の発展と文化を守ることや災害に対応することもできる。それが、どこからでも確認できるようになれば良いと思う」と語った。



最後に、音教授が「研究者や教育者に限らず、日本の資産としてアーカイブされている番組を展開できる状況を作ることが重要であり、それは放送法で規定された組織である放送番組センターが持つ大事な役割ではないかと改めて感じた」と締めくくった。

## ■ラジオ・DJ体験教室を開催



子どもゆめ基金の助成とFMヨコハマの協力を受け、小中学生向け「ラジオ・DJ体験教室」を開催した。例年夏休みに行っていたが、昨年度はコロナ禍で開催を見送り、今年度は感染状況が落ち着いた11月13日に開催した。

感染症対策のため1回4～5人で複数回開催し、スタジオに入る人数も制限した。参加者や保護者からは、「放送部員なので、プロの現場や働く姿を見、アドバイスを受けるなど本物を体験できて良かった」「実際に使われているスタジオや機材で体験ができ感動した」「イベントに参加できない日々が続いていたので嬉しかった」等の感想があった。

## 【DJ体験教室】（中学生）

参加者は、事前に自己紹介や「将来の夢」「今年中に達成したい目標」などのトーク原稿と、紹介したい曲を用意。FMヨコハマスタッフからアドバイスを受けながら、局内のスタジオでDJ体験を行った。参加者10名。



## 【ラジオ体験教室】（小学4～6年生）

FMヨコハマのスタッフから、ラジオの歴史やラジオ局スタッフの様々な役割等について話を聞き、うちわや貝殻など身近な道具を使った効果音クイズに挑戦した。その後、番組で使われたニュースや交通情報等の原稿を読みミニ番組を制作した。参加者11名。

## ■2021秋の人気番組展

10月15日～11月28日、地上8局・BS8局の協力を得て、恒例の「秋の人気番組展」を開催した。新型コロナの感染者数の減少により、団体見学の小中学生が会場を見学する姿も多く見られた。

今回は、地上波の話題のドラマや新情報番組の模型、デザイン画が多数展示され、番組で使用した小道具等の展示とともに好評だった。また、各局のブース以外に、放送開始25周年を迎えたTBS『世界遺産』の4K特別上映を行った。85インチモニターに映し出された高精細な映像に感動する声が多数寄せられた。



## ■令和2年度第2回番組保存委員会

11月24日、第2回番組保存委員会をオンライン形式で開催した。

<審議事項>

### ◇2021年度保存対象番組の選定

テレビ番組は、保存対象番組として選定した2019年度放送の1,096本、過去に遡って収集する番組として1996～2000年度の民放連賞と放送文化基金賞の受賞番組25本と大学等から要望のあった1本を合わせた26本、1970年度制作の協賛番組79本について提供依頼を行うこと、また、特別収集番組として3つのシリーズ番組、計63本を保存対象とすることを承認した。

ラジオ番組は、2020、21年度に放送されたNHK、民放各社63社の合計236本に加え、11月以降に発表される受賞番組約200本を追加し、各社に提供を要請していくことを承認した。

◇アンケートの結果に基づくラジオ番組の提供方法の改善について

ラジオ番組の提供方法は「保存番組複製基準（ラジオ）」に則り「CD（オーディオ形式）」としてきたが、ラジオ社へのアンケート結果に基づき、時代の変化に合わせた改善として、現行のCDに加え、放送局が適切と判断したファイル伝送等でも提供を可能とし、現行の基準複製費で本年度から対応を開始することを承認した。

### ◇ライブラリー業務に関する基本協定書の改定について

当センターがNHK、民放連、ATPの3者とそれぞれ取り交わしている「ライブラリー業務に関する基本協定書」について、①テレビ保存番組の複製メディアをHDCAMに限定しない改定をすること ②教育機関での番組利活用において試験運用として実施している ③中学・高校ほか対象範囲の拡大 ④クラウドを使用した在宅授業への対応 ⑤教育機関での利活用の送信システムの一元化を本格運用に向けて改定すること ⑥前議事のラジオ番組の提供方法について改定すること ⑦「保存番組複製基準」を基本協定書の附則から切り離すこと 以上6項目を反映させ、改定（案）とすることを了承した。

基本協定書の附則から切り離すこと 以上6項目を反映させ、改定（案）とすることを了承した。

<報告事項>

以下の4件の報告があり、了承した。

### ◇ニュースおよびニュース関連番組の収集について

昨年度の放送番組収集諮問委員会において、「ニュース関連の収集について」の委員からの意見を受け、本年5～7月に番組保存委員会委員各社にアンケートを実施した経緯と、その結果を報告。

### ◇サテライト・ライブラリーおよび大学等教育機関での利用状況

本年度の利用状況（公共施設／個別視聴13施設、上映会5施設、教育機関11校）と今後の利用予定の報告。

### ◇上智大学共催セミナーについて

11月20日開催の「番組アーカイブの意義と未来への活用2021」について報告。

### ◇事業の在り方に関する検討WGについて

## ■教育機関での番組利活用

### 【熊本学園大学】

2021年度秋学期、全学教育「情報メディア論Ⅱ」(村上雅通非常勤講師)の授業で、熊本放送制作のドキュメンタリー番組『封印～脱走者たちの終戦～』(1996)、『市民たちの水俣病』(1997)、『流転 追放の高麗人と日本のメロディー』(2004)などの8本が利用されている。

### 【広島大学】

2021年度第3ターム、社会系コース「法律学概説」(畑浩人講師)の授業で、NHK制作のドキュメンタリー番組『NHK特集 密室の攻防 男女雇用均等法の舞台裏』(1985)など2本が利用された。

また第4ターム、教養教育「日本国憲法」(畑浩人講師)の授業で、『NNNドキュメント'07 声の壁 発言できない議員』(2007/中京テレビ放送)、『NHK特集 最高裁判所』(1987/NHK)など3本が利用されている。

### 【上智大学】

2021年度秋学期、文学部新聞学科「ジャーナリズムの現在Ⅱ」(音好宏教授)の授業で、『映像'15 なぜペンをとるのか 沖縄の新聞記者たち』(2015/毎日放送)、『沈黙の山』(2018/チューリップテレビ)など4本が利用されている。

### 【立教大学】

2021年度後期、社会学部メディア社会学科「映像メディア論」(石井彰非常勤講師)の授業で、『原発のまちに生まれて～誘致50年福井の苦悩～』(2012/福井テレビ)、『17歳の先生～子どもの貧困を越えて～』(2016/北海道文化放送)など10本が利用されている。

### 【同志社大学】

2021年度後期、社会学部メディア学科「ジャーナリズム論Ⅱ」(小黒純教授)の授業で、『映像'08 なぜ警告を続けるのか～京大原子炉実験所・“異端”の研究者たち～』(2008/毎日放送)が利用されている。

### 【浦和学院高等学校】

2021年度、2年生「現代文」の授業で、『日本名作ドラマ ころろ』(1994/テレビ東京、テレパック)が利用されている。

## ■公共施設での番組利活用

### 【夕張市拠点複合施設りすた(北海道)】

10月15、16日「第89回 鹿之谷ゼミナール 北炭夕張新炭鉱災害から40周年を迎えて」が開催され、『NHK特集 廃山～証言・北炭夕張の崩壊～』(1984/NHK)、『時をつなげ! 夕張・激動20年のリレー』(2008/北海道放送)が上映された。

また10月18日より、上映番組を含む11本の視聴が開始された

### 【沖縄県立博物館・美術館】

10月23日、11月20日「石川文洋とベトナム戦争 関連催事 キュレータートーク」が開催され、『日曜スペシャル 海を渡った沖縄人たちの戦争 写真家・石川文洋の記録』(2000/NHK)が上映された。

## ■ 2021.9～2021.11の公開番組

### 【テレビ番組】

#### 『ソラタビ北海道

～海岸線 3000 kmスペシャル～

2019.01.06 / 札幌テレビ放送

#### 『NHKスペシャル イナサがまた吹く日

～風寄せる集落に生きる～

2012.06.02 / NHK

#### 『SBSスペシャル 賢師

～片桐邦雄・ジビエの極意～

2018.05.07 / 静岡放送

#### 『筆で伝える想い

～ダウン症の書道家がつなく被災地～

2018.09.30 / サンテレビジョン

### 【ラジオ番組】

#### 『ほころぶ街

～店長高取宏樹のつむいだ人と音楽～

2020.05.25 / 青森放送

#### 『決断 ～新型コロナ、問われる知事の

危機管理能力～

2020.05.30 / 和歌山放送

など、テレビ137本、ラジオ37本。

## 新公開番組 PICK UP!

### mrt 特別番組

#### 30年越しのノーサイド

2018.05.24 / 宮崎放送

プロデューサー：馬登貴

総合プロデューサー：松方健二

かつて高校ラグビー県大会決勝で戦ったおじさんラグーマンたちが、30年越しの決着をつけるため、熱い戦いを繰り広げる様子を追った。

1987年、共に県内有数の強豪校である都城高校と高鍋高校による宮崎県大会決勝は、10対10の同点で試合終了。高校ラグビーには延長戦がなく、くじ引きにより都城高校が花園行きの切符を手にした。それから30年、高鍋高校からの発案で、因縁の試合の決着をつけるべく、かつての両校選手は再び試合をすることになった。

当時の高校生ラグーマンも今や50歳

手前。それでも、思うように動かない体をよそに30年ぶりのチーム練習で気持ちは高まっていく。迎えた試合当日、運動不足から試合開始数分で怪我人が続出するも、高校生さながらにがむしゃらにボールを追いかけるメンバーたち。そしてついに、30年越しの決着をつけるノーサイドの笛が鳴る。

高校卒業後、大学や社会人ラグビーで活躍し日本代表に選ばれた人がある一方で、挫折し、ラグビーの道を諦めた人もいた。良くも悪くも“くじ引き”で人生が変わった選手たち。当時は納得がいかないこともあっただろう。しかし、30年越しの再試合が終了したあと、そこには敵味方なく共に青春を分かち合った仲間をたたえあう、本物の“ノーサイド”の光景があった。

### ◆放送ライブラリー公開番組数

テレビ番組 18,088本 / ラジオ番組 4,842本 / テレビ・ラジオ CM 11,962本 / 劇場用ニュース映画 2,683項目 (2021.12.31 現在)